

### 第3章 コンクール (『ロレンツォ・ギベルティ』より) リチャード・クラウトハイマー

Chapter III. The Competition  
(from *Lorenzo Ghiberti*)  
Richard Krautheimer

関根 浩子 訳  
Transl. Hiroko SEKINE

崇城大学芸術学部美術学科教授  
Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

ギベルティは、およそ20歳で歴史の舞台に登場する。1400-1401年の冬に、彼はペーザロからフィレンツェに戻り、アルテ・ディ・カリマーラカリマーラ同業組合が告知したサン・ジョヴァンニ洗礼堂の新しい青銅門扉を委嘱するためのコンクールに参加した。洗礼堂は長きに亘りフィレンツェ人の誇りであった。この壮麗なトスカナのプロト・ルネサンスの建造物が、1059年から1150年までの間に設計、建造されたということは、13世紀までには忘れ去られてしまっていた<sup>(1)</sup>。そしてその代わり、この洗礼堂は6世紀半ばにすら遡る早い作例で、ローマのラテラノ大聖堂の「コンスタンティヌスの洗礼」が行われた八角形のサン・ジョヴァンニ・イン・フォンテ洗礼堂の模造体として、それに似せて設計、建造されたキリスト教会の最初の洗礼堂であるという伝承が生まれた。13世紀末か、おそらくは14世紀初めには、その洗礼堂は本物のローマ時

代の建築であるマルス神殿が洗礼堂に再献堂されたものだとする別の解釈が世人の耳目をひいた。それは、同洗礼堂の数多くの建築的特徴が、明らかにパンテオンに関連付けられるという事実に関係していたからかもしれない<sup>(2)</sup>。こうした伝統は、先ずはダンテ<sup>(3)</sup>において反映され、14世紀半ばより前にはジョヴァンニ・ヴィッラーニ<sup>(4)</sup>もそれを表明したように思われる。こうして、この洗礼堂はフィレンツェにおける最初で最古の真に唯一のローマ建築であるという主張が決定的となった。こうした議論に直接関係するヴィッラーニの年代記の複数の章には、明らかにこうした考えとの結びつきが示されている。例えば、彼は、フィレンツェ人はローマ人と近い関係にあったと言い、また、実際フィレンツェは小ローマであったがゆえに、市民はこのマルス神殿をローマの工人の設計で建てることでフィエーゾレに対するローマ人の勝利

を記念したと締め括っている。言い換えれば、14、15世紀の一人のフィレンツェ人にとって、この洗礼堂は自身が属する都市の高貴な過去を証するこれ以上ない証拠だったのである。

それゆえ、この洗礼堂に関係する仕事は何であれ、市民の目から見れば重要な出来事であった。同堂の建設自体は1150年に完了されたが、この建造物には、以後数世紀に亘って、その周知の紀元に値する装飾を施す努力が続けられた。聖歌隊席が付加されたが、そのモザイク群は1225年に遡るものである。1271年頃から1301年より後までの間に、巨大なドーム内に大規模なモザイク連作が付加された<sup>(5)</sup>。1309年から1321年までの間には、大理石の彫像群が堂外の複数の入口の上に置かれた。それらのうち非常に大きな彫刻群は、まだフィレンツェで目にすることができる<sup>(6)</sup>。1329年に最終的にアンドレア・ピサーノが青銅門扉<sup>(7)</sup>の設計を委嘱された。それは明らかにフィレンツェの古いライバルであるピサの大聖堂の青銅門扉群と栄光を競うことを意図したものであった(図1)。その28枚のパネルは4列7段から成っており、それらの周囲は円花飾りやダイヤモンド形、並びにコーナーに獅子をあしらって装飾した細長い鉄枠で縁取られている。下段二層の各パネル内の四葉菱の中では、枢要徳の擬人像が椅子に座している。上方の五段のパネル群は洗礼者聖ヨハネの物語を表現している。人物像や背景、フレームには鍍金が施されている。フィレンツェやその近郊では、まとまった人数の熟練工を調達できなかったため、鑄造補助者としてヴェネツィ

ア人の職工が送られた。この扉は1338年に完成した際、一伝承によれば、大聖堂に対面する入口に設置されたという<sup>(8)</sup>。しかし、同扉はおそらく当初から、唯一都市に面していたがゆえに、洗礼堂の三つの入口の中で最も重要であった南側の現在の場所を占めていたと思われる。東側の扉は、確かに最初から主要な入口として意図されてはいたが、大聖堂が殆ど形を取り始めている無秩序な建設現場に依然として面していたし、北側の扉の前方には建造されていない近郊住宅地域が横たわっていたからである。続く二世代の間も、アンドレアの青銅門扉は、依然として洗礼者聖ヨハネに敬意を表して建設されるべき最新の大事業であり続けた。

フィレンツェでは、長いこと、7大同業組合に重要な公的建造物の作業監督を委託するのが慣例となっていた<sup>(9)</sup>。必ずしも仕事の資金を調達するというわけではなかったが、一つの特別な同業組合が、共同管理の代行役や、建造に割り当てられた資金担当の保管者のようにふるまった。サン・ジョヴァンニ洗礼堂の装飾が、フィレンツェで最も影響力があり、かつ最も豊かであった同業組合、アルテ・ディ・メルカタンティ・ディ・カリマーラ「カリマーラ商人同業組合」の管理下に置かれる以上に相応しいことはなかった。遠い昔から、彼らは洗礼者聖ヨハネの守護下にあった。カリマーラ同業組合は、12世紀に創設された当時は財閥の同業組合であった。そして外国の織物の卸売業者や再加工業者、毛織物輸入者だけでなく、絹や金襴、宝石、またその他のレヴァント由来の貴重な素材の輸入業者、並びにその諸活動がフィレンツェ経済

中に密接に結びつけられていた銀行家をも含んでいた<sup>(10)</sup>。12世紀末には銀行家が抜け、自分たちの独立した組合である両替商同業組合を創設したが、金融取引業である二つの組合間の境界には依然として融通性があった<sup>(11)</sup>。数年後には、絹織物同業組合が小売業者によって創設された。そうした小売業者には、1247年に、レヴァント産の絹やその他の品物の輸入業者、さらに後には絹織物工や刺繍工、金細工師が加わった<sup>(12)</sup>。1371年か、おそらくそれより数年前に、毛織物輸入業者や織物製造業者は、地元の産物を推進しようとして、外国産織物の輸入業者や再加工業者から分かれ、殆ど独占的な製造組合である羊毛加工同業組合<sup>アルテ・デッラ・ラーナ</sup>を創設した<sup>(13)</sup>。高い関税に保護されたことによる地元の羊毛加工業の発展やレヴァント貿易の増大、時を同じくしたフィレンツェの国際銀行群の復活——それらの再興はいずれも14世紀の最後の33年間に起った——は、羊毛加工業や絹織物業、銀行業の同業組合を、フィレンツェの指導的な商社団体にした<sup>(14)</sup>。カリマーラ同業組合はその重要さを失うことなしに性格を変えた。同組合員たちは、外国産の織物を輸入して再加工する旧式の商売に頼るのをやめ、14世紀半ば以降は、フランドルやフランスの市場から近東まで外国産の織物を船で運んで販売する毛織物輸入業者やフィレンツェ産の織物の輸出業者として、また、国際的な金融業者として財をなした。1393年のクーデターによって、カリマーラ同業組合は、当時アルビッツィ家やストロッツィ家、ウッツァーノ家が代表者であった有力貴族の党派、財閥派<sup>オッティマーティ</sup>の砦とされた。カリ

マーラ同業組合は、大商社や政治的組織、機構が行う特有の諸活動に同業組合の諸活動を付加して、貧困を改善し諸芸術<sup>アーツ</sup>を推進した<sup>(15)</sup>。貧困の改善と諸芸術の推進は、12、13世紀以降、カリマーラ同業組合の伝統的な二つの目的となっていた。同組合はおそらくは1180年以降、また1228年からは確実に、サン・ミニアート聖堂の完成と後年の修繕を管理した。1192年にはサン・エウセビオ病院の担当となり、1360年にはさらにサン・ガッロ病院の管理がそれに加わった。1388年にはサンタ・クローチェ修道院の信託管理、また、1441年には同教会の信託管理も請け負った。1405年から1426年までは、同組合はサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂の回廊に隣接するニッコロ・アッチャイウオーロ礼拝堂の建設と装飾、また1418年にはフィエーゾレのサン・ドメニコ聖堂の完成を指揮した。1427年にはピッポ・スパーノの遺言の執行者となり、その権限によって、1434年から1437年までサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ聖堂の建造を指揮した。これらの仕事は数的には大したことではないとしても、他の同業組合の仕事をはるかに凌ぐものであった。例外と言えるのは羊毛加工同業組合<sup>アルテ・デッラ・ラーナ</sup>で、同組合は1331年以降、唯一のプロジェクト、といってもフィレンツェにおける非常に大規模な芸術的事業である大聖堂の建造と装飾を担当した。

カリマーラ同業組合が着手した社会的、文化的分野におけるすべての仕事の中で最も重要であったのは、サン・ジョヴァンニ洗礼堂の監督であった。同組合はおそらく1157年から、そして1182年までは確実

に、同洗礼堂の修繕や装飾完成の責任者の任にあり<sup>(16)</sup>、オフィツチャーリ・デル・ムザイコという委員会を通して活動しながら、天蓋のモザイクや建物の修繕、装飾、並びに調度品の完成作業を指揮した<sup>(17)</sup>。1400年までは、カリマーラ同業組合の偉大な栄光とは、1329年から1336年にまで及んだアンドレア・ピサーノへの青銅門扉制作の委嘱とその監督であった。

アンドレアの青銅門扉を一組にするか二組にするかの決定は、俄かになされたものではなかった。早くも1338-1339年には、少なくとも複数の門扉用の素描が準備されていた<sup>(18)</sup>。しかし、そのプロジェクトは、一連の災害、つまり1339年から1346年まで続いた経済危機やその後に続いたアテネ公国の独裁制、また、決定的であった1348年の疫病とその悲惨なすべての結果のために却下されてしまった。一世代後に、存在していた木製門扉を覆うか、木製門扉を青銅門扉と置き換えるか、いずれかの目的のためにブロンズが購入された<sup>(19)</sup>。その計画は再び無効となったが、14世紀の最後の数年に復活したように思われる。事実、計画は今回はるかに前進したように思われる。そしてその計画は、カリマーラ同業組合にとっておそらくきわめて重要であったに違いない。当時フィレンツェにとって絶えざる脅威であったジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティが、1400年3月のヴェネツィアとの協定によって一時的に軟化したため、同組合の協議会<sup>コンスルズ</sup>はより容易に一つの決定に至ったのかもしれない<sup>(20)</sup>。1400年の夏にフィレンツェを襲い、伝えられる所では3万人を死に至らしめ、アペ

ニン山脈を越えて<sup>(21)</sup>逃避する者まであった疫病ですら、その計画を止めさせはせず、同年の冬には、カリマーラ同業組合の協議会は、新しい青銅門扉のためのコンクールを開催したのである。

こうした要素のすべて——サン・ジョヴァンニ洗礼堂、カリマーラ同業組合、アンドレア・ピサーノの門扉——の結びつきが、ギベルティをペーザロから引き戻したコンクールの印象的な背景を成している。フィレンツェにおけるその最も重要な芸術保護団体は、新しい青銅門扉のための試作品を要求した。その門扉は、フィレンツェの中で最も傑出した建造物を最終的に装飾し、当時までにフィレンツェで制作された唯一の重要な青銅彫刻と並ぶという特権をもつことになるものであった。

事実、コンクール閉幕時の、まさに新しい門扉の仕事が始まる前に、その門扉は大聖堂の向かいの入口の中央に割り当てられた (Dig. 7 ; Doc. 60)。1400年までにこの入口は、洗礼堂へ導く最も有名な入口となった。大聖堂の身廊とその複数の入口の装飾は、その時まで完成されていた。ファサードの大彫刻群は今しも発注されようとしており、交差部上の天蓋については審議中であった。その新しいファサードの向かいで、間もなく、洗礼堂の新しい青銅門扉は、大聖堂の主門扉や、その主門扉が開いている場合には重要な祭壇と向かい合うことになる。重要な祝祭日には、大聖堂から行列が進み出て、東側入口を通して洗礼堂に入り、北側門扉を通して洗礼堂を去ることになる<sup>(22)</sup>。こうして東側入口は、フィレンツェの旧市街と新市街の境界上に

ある聖なる建造物群全体の言わば中心となった。東側門扉のためのコンクールは、こうした観点からのみ、その真の規模が評価できるものであり、彫刻分野においてかつて催されたすべてのコンクールの中で最も重要であり、また、70年以上もの間にフィレンツェで起こったいかなる出来事よりも明らかに重要なことになると想定された。具体的に言えば、勝者には輝かしい未来が確約され、カリマーラ同業組合はおそらくその勝者をさらに後援することになる。職業的には、彼は、勝利したという事実によって同時代の傑出した彫刻家イブソ・ファクトの一人として、また、過去の最も優れた青銅門扉設置者であるアンドレア・ピサーノに匹敵する者として認められることになる。

同コンクールの全体的な背景はそのようなところである。コンクールの準備や進展、最終賞金の詳細は、背景ほどは分かっていない。ストロツィの抄録（App. C<sub>1</sub>）は、実際の門扉に対してなされた仕事については有用であるが、そのコンクールについては殆ど完全に沈黙しており、若干の取るに足らない事実を記録しているにすぎない。1402年か、おそらく1403年の初めにギベルティにその門扉を委嘱するという決定はなされた（Dig. 4；Doc. 1）。1402年9月にジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティが没した後、フィレンツェの政治状況が継続的に改善したことで、カリマーラ同業組合の会員は、コンクール参加者の中から好ましい人物を選ぶという問題に本気で取り組んだ可能性がある。それと同時に、従って最初の契約の署名の前になされた「ネンチョ・ディ・バルトルッチョ」へ

の30フロリンの支払い（Dig. 5；Doc. 80）は、コンクールに出品された浮彫の買入れとその鍍金に関係しているかもしれない。実際、その総額はかなりのものである。史料の乏しさは、ある程度は、二つのほぼ同時代のコンクールに関する記述であるギベルティ自身の『コンメンタリ』中の報告と、『ブルネッレスキ伝』の不詳の著作者のそれによって補われる。両報告には偏見が見られるため、言うまでもなく多少疑って受け取らなければならない。とはいえ、それらはしばしば考えられていたよりはるかに多くのことを明らかにしてくれる。実際のところ、両報告は極めて重要であり、また、後年のヴァザーリの叙述よりはるかに興味深い情報源と言える。

『コンメンタリ』におけるギベルティ自身の記述は、事実に基づいており、多少とも信頼できるように思われる<sup>(23)</sup>。彼は、コンクールの告知や、サン・ジョヴァンニ洗礼堂担当の委員会である大聖堂建設管理部オベラーイの面前に7人の競技者が召喚されたことについて語っている。また、コンクール用の特別課題としてイサクの犠牲を扱ったパネルが選ばれたとし、7人の芸術家それぞれに与えられたブロンズの総量や、コンクールの閉幕に対して設定された締め切りについても触れている。さらに彼は、競技者たちの名前や出身地を列挙し、自分に勝利の栄誉を授けた34人からなる審査会に言及している。ギベルティは、カリマーラ同業組合の協議会や大聖堂建設管理部に対して審査会が提出した文書に触れているが、この報告書を、「協議会や大聖堂建設管理部、同業組合の会員全

員」によってなされた最後の青銅門扉の委嘱状とは区別している。コンクールの出来事についての彼の説明はもちろん脚色されてはいるが、進行の詳細やその実施組織は、それ以上正確には書きようのないものであった。

『コンメンタリー』中の叙述が、ギベルティ自身に有利に歪曲されているとするなら、『ブルネッレスキ伝』は完全にギベルティを中傷するものとなっている。アントニオ・ディ・トゥッチョ・マネッティ（1423-1497）が本当にこの小冊子の著者であるか否かは我々にはどうでもよい<sup>24</sup>。重要なのは、それが1472年<sup>25</sup>より後で、なおかつ1497年より前に書かれ、現在の形になったということ、また、それゆえに、その著者がたとえ「（ブルネッレスキを）知っていて、彼に語りかけた」のだとしても、部分的には風聞に基づいていたに違いないということである。我々にはまた、その英雄を近世芸術の創設者として、また、フィレンツェをその英雄の源泉として称えることが意図されているということや、ギベルティがそのプロセスの中ではブルネッレスキの生涯の敵対者、非難すべき無能な敵対者として示されているということも重要なことである。結果的に、同コンクールに関するこの記述は、ギベルティを、ブルネッレスキを騙し、当然受けるべき最高賞から外す策略をめぐらした悪者としている。その話は、「続いて数年後に行われた同じ二人の主人公が参加した大聖堂の天蓋のためのもう一つのコンクールの予型論的警告のようなものと解される。事実から言えば、この著者は到底ギベルティは

ど情報に通じていない。彼はコンクールを指揮している組織については殆ど認識していないし、カリマーラ同業組合関係の様々な組織や協議会、洗礼堂担当委員会、同業組合員を細かく区別してはいない。また彼は、最高のブロンズ鑄造師を探していた大聖堂建設管理部は、フィレンツェ人の間にしかそうした人物を見出せなかったと主張している。彼の考えではフィレンツェが世界の中心であるため、7人の競技者ではなく、「いずれもフィレンツェ人」であるフィリッポとロレンツォ・ディ・バルトロのわずか二人についてしか述べていない。そして「後者の名前は、チオーネの息子であることから、ロレンツォ・ディ・チオーネ・ギベルティとして、青銅門扉上に刻まれている」としているが、それはギベルティの微妙な長子の権利に対する慎重なジャブと言える。彼は、コンクール・パネルの型を作って鑄造した芸術家は彼ら二人だけであったと示唆し、ギベルティとブルネッレスキが実質的にはその仕事を共同で行うべきだとする審査会が大聖堂建設管理部に提出した不明確な報告書についての話で締め括り、さらにブルネッレスキが怒って辞退したと記してもいる。『ブルネッレスキ伝』は、先入主による偏った見方をしているとはいえ、おそらく非常に狂信的であるがゆえに、そのコンクールが引き起こした興奮した思潮や同時代人に対するコンクールの印象についての示唆に満ちている。

ヴァザーリの同コンクールに対する評価は、彼のギベルティとブルネッレスキそれぞれの伝記中に含まれている<sup>26</sup>。ヴァザー

り自身の言葉によれば、コンクールに対する評価は『コンメンタリー』と『ブルネッレスキ伝』の両方に基づいており、結果的には、コンクールに関する二つの矛盾する見解を引き継いで、両者の照合確認のない成果物となっている。さらに話全体があらゆる種類の逸話で潤色され、例えば、「友人」ではなく老いたバルトルッチョ自身がギベルティをフィレンツェへ呼び戻して自らの養子をサポートしていたり、審査会で見解が分かれ、7人全員の試作板が公開展示されたりしている。当時10代であったドナテッロの名前が誤って競技者中に挙げられている一方、ニッコロ・スピネッリ・ダレッツォとニッコロ・ランベルティの二人は、名前が似ていたために二人で一人の人物とされてしまっている。このようにヴァザーリは、終始事実と空想を混在させている。しかし、こうしたことすべてにも拘わらず、彼は技術的、様式的、また批評的性格の若干の価値ある彼自身の見解を付加したのであった。

こうしたすべての情報源からは、同コンクールの開始から展開に至るかなり明瞭な図式が浮かび上がる。『コンメンタリー』と『ブルネッレスキ伝』は、1401年をコンクールの開幕年としている点では一致している。1432年に「羊毛加工同業組合」<sup>アルテ・デッラ・ラーナ</sup>が聖ゼノビウスの聖骨器の制作依頼を準備していた際には、大聖堂の協議会や常設委員会、大聖堂建設管理部は、構想された事業の一般的な諸規定を連帯で起草した（Dig. 165）<sup>27</sup>。彼らはまず、「傑出した俗人、経験のある芸術家、博識な神学者…」から成る諮問団体員を選んだが、それは

「最初のグループはその慎重さゆえに、二番目のグループはその技術ゆえに、そして三番目のグループはその博学な知識ゆえに、その問題に必要なことを皆十分身に付けているため、彼らの判断に従って実施されるならば誰一人それを非難したり咎めたりしない」と考えたからであった。この委員会は、続いて、協議会や大聖堂建設管理部のために、従うべき全般的な方針——礼拝堂の精選、壁や窓の装飾、聖遺物の移送、記念祭——に関する文書を起草した。協議会や大聖堂建設管理部は同文書を受理した後で、大聖堂建設管理部の議長や同業組合の傑出した若干の会員からなる「デプターティ」という小委員会を任命した。彼らの役目は、公的コンクールの経過の過程で提出された草稿や模型を調べたり、「彫刻家や画家、建築家、その他のそうした問題について学んだ」芸術家や識者から成る審査会の見解を理解したりすることであった。デプターティは審査会の選択を同業組合や大聖堂建設管理部の協議会に戻し、協議会が今度は勝者に仕事を委嘱した。しかし、これで役割は終わりというわけではなかった。契約書への署名に際し、大聖堂建設管理部は、自分たちの数名のメンバーから成る新しい実行委員会を任命し、「引き続きロレンツォと共同してこの仕事に携わるよう命じた」。この実行委員会は、同寺院の精細な細部や装飾、浮彫的確な主題について計画を立てたり、ギベルティからの材料の要求を承認したり、全体的としてギベルティと大聖堂建設管理部との間の連絡役を果たしたりすることになっていた。作業の途中で特殊な問題が発

生した場合には、実行委員会は、例えばレオナルド・ブルーニに寺院の銘文作成を依頼したように、絶えず専門家に助言を求めた。

これとほぼ同じような手続きが、洗礼堂の新しい青銅門扉のための 1401 年のコンクールにおいて適用されたように思われる。もっとも、この時点で複雑な助言者組織が考案されていたことは疑いない<sup>(28)</sup>。カリマーラ同業組合が洗礼堂担当とした委員会であるオッフイチチャーリ・デル・ムザイコ、もしくは通称されているように大聖堂建設管理部、あるいは政府の<sup>ゴヴェルナトリー</sup>管理部<sup>(29)</sup>が、おそらくカリマーラ同業組合の協議会の承認を得て、このコンクールに関する全体的な規定を定め、必要な資金をコンクールに充てたに違いない。彼らは確実に有能な専門家を得ようと、コンクールの告知を決め、「イタリア中の腕の立つ名匠たち」に参加を呼び掛けた。コンクールを適切に準備して監督するために、オッフイチチャーリ・デル・ムザイコは、技術的・芸術的趣向の諸問題に対処する 34 人のメンバーから成る陪審団を備えた審議会を持った。この審議会はコンクールの諸規則に対して責任を負っていたに違いないし、最終的に勝者に賞品として委嘱されることになっていた青銅門扉の概略を明らかに決定した。その門扉は、アンドレアの門扉と同じように、それぞれが 1 ブラッチョ幅で内に四葉菱型を含んでいる 28 枚のパネルに分割されることになっていた。同審議会は一般的な主題を選び、絶対ではないにしろ、連続する諸場面やその個々の登場人物像を決定したと思われる。コンクール・パ

ネルの主題を決定し、完成の締め切りを定めたのは確実にこの審議会であった。

このコンクールは全体的にこうした方針に沿って進んだが、困難がないわけではなかった。コンクールの際中、もしくはその直後の作業が始まる直前に、青銅門扉の計画は変更された。コンクールの開始時に計画されていた主題は旧約聖書であった。ギベルティは、すべての競技者に「この門扉の一つの物語……イサクの犠牲」を構想させることを審議会は主張したと書いている。後になって、「この門扉に新約聖書を設置することが決定され」、受賞したそのイサクの犠牲の浮彫は、「旧約聖書が表現される場合、その別の扉のために」取っておかれたのである (Dig. 6 ; Doc. 33)。

一連の旧約聖書とすることが計画されていたため、コンクール・パネルの選択は明らかに旧約聖書の連作群に共通の一場面でなければならなかった。というのも、勝者の浮彫をその最終計画に組み込むという意図がひたすら感じられるからである。イサクの犠牲は、磔刑の類型学上の傑出した予型であり、中世を通じてそのような意味で、すべての巨大な旧約の連作の重要部分となっていた。従って、コンクール用にこの主題を選ぶことは自然なことであった。

しかし、大聖堂建設管理部の審議会は、この主題を単純に規定することはせず、明らかにそれ以上の特別な一連の要求項目を規定した。なぜなら、ブルネッレスキとギベルティのコンクールの浮彫が、いずれも同数の人物像を含み、イサクの犠牲独自の範囲を超えているのは偶然とは考えにくいからである。この主題の伝統的な諸要素



——アブラハム、イサク、天から出現する天使、羊、茂み——の他、岩の下方に二人の召使いと泉から水を飲む驢馬がいる。両浮彫に見られるこうした特別な人物像の組み合わせ具合は、カリマール同業組合の審議会がそれを要求したことを強く示唆していると言えるほど著しく一致している。こうした組み合わせは伝統的なものではなく、イサクの犠牲と待機する二人の召使いは、創世記 22 章に述べられている通り、原則として二つの異なった場面を成している<sup>30</sup>。これら二つの場面が一つに融合されているのはきわめて珍しい。ハミルトン・バイブルとそれに関連する 1360 年頃のナポリ手稿<sup>31</sup>では、アブラハムはイサクを伴って下層におり、右角の驢馬の隣に腰かけている一人の召使いに注意を向けている。ここにはさらに、コンクール・パネルのためになされた選択を予示する二場面の組み合わせが見られる。そのデザイン全体は、多少ともブルネッレスキのデザインに比較できる。ハミルトン・バイブルは、少なくとも 1515 年までに、また、おそらくはそれよりずっと前からメディチ家の所有物となっていたため、それこそが、審議会の助言者たちがイサクの犠牲と待機する召使いたちの場面とを結びつけることを思いついた着想源と示唆したい誘惑にかられる。さらに、万一この推察が事実と証明されるとしても、審査会には助言者たちにその提案を命じるだけの特別な理由があったと感じずにはいられない。それは、その選択を思いつかせた聖書的解釈に明らかな、<sup>ドラマ</sup><sup>ジャンル</sup>劇的事件と形式との間の対比に対する単なる配慮であったのだろうか。ヴァザーリ

は、その物語が選ばれたのは、幾つかの現実的側面を同時に示すための芸術家の能力や浮彫技術の熟練度を試せるものであったからだとしている。というのも、ヴァザーリによれば、（待機する召使いの場面と組み合わせた）犠牲の場面は、競技者に「<sup>アート</sup>技術的困難」に対処することを要求したからである。「技術的困難」は、ヴァザーリにおいては、「背景や裸体、襷のよった衣をまとった人物像や動物、また盛り上がった浮彫や半浮彫、浅浮彫の使用」の表現を意味している<sup>32</sup>。ヴァザーリの言葉は、価値判断が叙述に入り込んでいる場合は当てにしていけない。複数の浮彫面に対する彼の強調は、おそらく 16 世紀の芸術批評が作り上げた絶対的な区別に基づいているだけでなく、コンクールの浮彫群には当てはまりもしない。ブルネッレスキの浮彫においてもギベルティの浮彫においても、半浮彫や浅浮彫は意義深いという程には適用されていない。他方で、ヴァザーリの「背景や裸体、襷のよった衣をまとった人物像や動物」に対する言及は、完全に彼自身の創意による引喩というわけでもない。彼の言及は、主題は「多くの老若の人物像、動物、山岳や木々<sup>33</sup>」のために選ばれたと明言している、より信頼のおけるアノニモ・マリアベッキアーノが用いた言葉とびたりと符合している。こうした用語がおそらくコンクール関連の史料に由来しているということは、ストロツィの抜粋中にそれらの言葉が現れていることによって示唆されている。それらの抜粋は、ギベルティがその門扉のために作成した二つの契約書から取られたものであり、1403 年の

契約書 (Dig. 8 ; Doc. 26) の方では、ギベルティは「自身の手で人物像や木々、また類似のものを四葉菱型の中に制作しなければならない」と述べており、1407 年の契約書 (Dig. 22 ; Doc. 27) の方は、「彼はとくに髪や裸体など、きわめて高度な完璧さを要求する諸部分を……制作しなければならない」と明記している。契約書中にこうした要素が言及されている以上、青銅門扉の制作を監督する審議会がそれらを重要と見做していることは明らかと言える。イサクの犠牲中におけるそうした要素の存在は、こうして十中八九、コンクールの主題として審議会がそれを選んだことで重みを増したのである。

さらにコンクールを担当した審議会が競技者を選抜したことも明らかである。その際に用いられた手続きについては、本当のことを言えば、情報源の間に幾分不一致が認められる。『ブルネッレスキ伝』はブルネッレスキとギベルティだけが競技に召集されたと主張しているが、この主張は明らかにフィレンツェを当時の最も重要な都市として選り抜くための願望に規定されていた<sup>34)</sup>。ギベルティは、『コンメンタリ』において同様に、競技者は審議会の招きで選ばれ、審議会は「熟練者とされる名匠たちを迎えにやって彼らの作品で確かめようとした」が、ギベルティ自身のように明らかに二次的な候補者を、「フィレンツェの友人たち」の示唆で適用することもあったと示唆している<sup>35)</sup>。最初の大集団はおそらく審議会によって絞り込まれたが、いずれにせよ最終競争にはフィリッポ・ディ・セル・ブルネッレスコ、シモーネ・ダ・コッ

レ、ニッコロ・ダレッツォとして有名なニッコロ・ディ・ルーカ・スピネッリ、ヤコポ・デッラ・クエルチャ、フランチェスコ・ダ・ヴァルダンブリーノ、ニッコロ・ディ・ピエトロ・ランベルティ、そしてロレンツォ・ギベルティの 7 人だけが含まれていた<sup>36)</sup>。それは非常に注目すべき選抜であった。競技者たちの出身や、年齢や専門的修業はおそらく審議会並びに部外者によって議論し批判され尽くしており、そうした批判は実際、『ブルネッレスキ伝』中に反映されてもいる。このコンクールはフィレンツェ人に限られてはいなかった。7 人は「イタリア中の」出身者ではなかったものの、トスカーナのさまざまな地域の出身者であった。ブルネッレスキとギベルティの二人だけはフィレンツェ市民の息子であった。7 人のうちの一人、シモーネ・ダ・コッレは、ヴァル・デルサという旧フィレンツェ領の出身であった。ニッコロ・ランベルティはフィレンツェ在住ではあったが、アレツォの一族の出であった。ニッコロ・ディ・ルーカ・スピネッリは明らかにアレツォ在住であったが、アレツォはちょうど 16 年前にフィレンツェ共和国に獲得されていたため、スピネッリはフィレンツェの市民ではなく臣民となっていた。以上のグループは、ヤコポ・デッラ・クエルチャとフランチェスコ・ダ・ヴァルダンブリーノという二人の芸術家の参加によってさらに拡大された。二人は、フィレンツェの年来の主要な敵国であるシエナの出身であった。フィレンツェの地元最良は怯んだに違いない。競技者間の年齢の不均衡は疑いなく、さかんに

議論された論点であった。明らかに 50 歳位であったニッコロ・ディ・ルーカ・スピネリと、約 40 歳であったヤコポ・デッラ・クエルチャを除けば、いずれも若かった。ニッコロ・ディ・ピエトロ・ランベルティはちょうど 30 歳を超えたばかりで、フランチェスコ・ダ・ヴァルダンブリーノもほぼ同じであった。ブルネッレスキとギベルティは非常に若く、それぞれ 23 歳と約 20 歳であった。競技者間の専門的修業の多様性も異議を喚起していたに違いない。例えば、ニッコロ・ダレッツォとブルネッレスキは金細工師として会費を納めた正規会員となっており、シモーネ・ダ・コッレは後年大砲鑄造者として名声を得た。クエルチャとフランチェスコ・ダ・ヴァルダンブリーノは、木彫家と石彫家の同業組合のもう一人の尊敬された会員であるニッコロ・ディ・ピエトロ・ランベルティと並ぶ、彫刻家にして木彫家であった。若いギベルティはおそらく金細工師として修業したが、その時点では画家としての制作経験しかなかった。

コンクールの結果はよく知られている。その開幕の 1 年半から 2 年後に当たる 1403 年 3 月 25 日に先行するフィレンツェ暦の 1402 年の末に、カリマーラ同業組合の協議会は最も若い競技者であったギベルティにその門扉の制作を任せることに決めた (Dig. 4 ; Doc. 1)。手短に言えば、その後、1403 年 3 月以前に、最初の 30 フロリンが「ネンチョ・ディ・バルトルッチョ」に支払われたが、それはおそらくコンクールの浮彫の買入れと金箔置きのためのものであった (Digs. 5, 6 ; Docs. 80, 33)。協

議会の決定は明らかに大聖堂建設管理部が起草した一報告書に基づいていた。そしてこの決定は、次には、彼らが審議会に要請した「評議員会は彼ら（専門家たち）の自筆の審判を望んだ」という文書による声明文上に掲載された。しかし協議会は、カリマーラ同業組合の上流階級の組合員の意見をも求めたように思われる。というのもギベルティは、「協議会や大聖堂建設管理部、そして商人同業組合全体」が満場一致で自分の勝利を承諾したと明言しているからである。この手続きは一般的ではないように思われるが、その反面ギベルティの言葉は決して無視しえないもののように思われる<sup>37)</sup>。

評議員会である大聖堂建設管理部が、おそらく審議会の評決の証拠として、文書による声明文によってその最終の諸行為を保護しようとしたことは理解できる。専門家からなる審議会は、7 人の競技者と同様に、専門的修業や出身地が多様な「フィレンツェやその他の近隣地域出身の……画家や金細工師、銀細工師」で構成されていた。しかし、公平無私な決定に到達するためにあらゆる予防措置がとられたにも拘わらず、状況は依然として細心の注意を要し、その文書による審判にものを言わせることは無害ではありえなかった。多くが若く、金細工師としての訓練すら受けていない最終の 7 人の選抜は、それだけで攻撃に晒されやすかった。今や全競技者中でも一番若い、20 歳の若者に最高賞が下り、なお悪いことに彼は金細工師や彫刻家たちの同業組合の会員でもなかった。また、その組合であれば画家として役割を果たしたと

アルテ・ディ・メディチ・エ・スベチヤーリ  
思われる「薬種商組合」に入会していたことすら確かではない。なかでも驚くべきは、彼がまだ親方ではなかったということである。わずか数年だけ年長のブルネッレスキは、1398年までには金細工師として登録申請しており、単に数フロリン支払うだけで一人の名匠<sup>マスター</sup>として入会を期待できた。そして実際彼は1404年にはそうした<sup>38</sup>。他方、ギベルティは、継父バルトロ・ディ・ミケーレの店の名で働かなければならなかった。もし契約書に署名がなされる場合は、絹織物同業組合に会費を納める名匠として、バルトルッチョに法律上の責任を負わせるような方法で表現されなければならなかった。こうした状況が、不公平さや優先的な扱い、区別に対する非難を生じさせることはほぼ確実であった。

事実、この種の非難については多少とも証拠がある。ギベルティが40年後に『コンメンタリ』を書いた時にはすでに、そうした反訴は一層やかましくなっており、『ブルネッレスキ伝』では過激にもなった。『ブルネッレスキ伝』の扱いから分かるように、細部は言うまでもなく歪められている。フィリッポは、決まって、支援を受けるのを潔とせず、誰にも助言を求めずに自身の課題に着手した若い独立した天才として示されている。他方ギベルティは、審議員たちに助言を乞い、彼らの示唆に沿うように浮彫を作り直すことで彼らに取り入ろうとする策動的で姑息な手段を非難されている。しかし、『ブルネッレスキ伝』によれば、ギベルティのあらゆる策動的行動にも拘わらず、専門家たちは最高賞をギベルティとブルネッレスキの両方とする報

告書を提出した。二人は協力して門扉を設計、鑄造するよう依頼されたが、ブルネッレスキがその栄誉を二人で分けるのを単に拒んだために、ギベルティが単独の勝者とされたのである<sup>39</sup>。15世紀の最後の25年間におけるフィレンツェのゴシップ好きな工房は、コンクール時には見解がはっきり分かれていたという流言を執拗に繰り返した。そうした流言は、30年代や40年代以前にはおそらく起こらなかった。ギベルティが勝利の結果として制作した青銅門扉は、素人からは引き続き称賛されていたが、目利きたちからは時代遅れで新しい門扉である天国の門にはるかに凌駕されてしまっていると見做されていた。この点では、ギベルティ自身、1452年に彼の最初の門扉をあまり人目につかない北門に移した、自分より若い世代であるカリマーラ同業組合の指導者たちに暗に同意している。その間にブルネッレスキは、フィレンツェの誇りである大聖堂に円蓋をかけるという困難な偉業を成し遂げ、さらに町中に新しく大胆な様式で建造物を建てることで、近世建築の偉大で老練な人物という地位を得ていた。彼の同コンクールにおける初期の敗北は、何とかうまく解釈して片付けなければならなかったため、『ブルネッレスキ伝』にはそうした意図と感情があまりに露骨に反映され過ぎているのである。

しかし、後に見解が分かれたという事実は、コンクールの時点で意見の相違が存在しており、その不和がもっぱら時間の経過とともに一層辛辣になったという可能性を除外するものではない。そのことは、1420年においてすら、「町はいまだにその青銅

門扉の気質のままであった」とする『ブルネッレスキ伝』中に辛辣に表明されている。ギベルティ自身、1450年の直前に『コンメンタリ』で同コンクールについて論じる際、どちらかと言えば気を使いながら、自分に有利となった最終判断を正当化しているように思われる。彼は審査会の見解が文書で示されたという事実<sup>40</sup>に固執し、自身の価値に関してカリマーラ同業組合のあらゆる階層が満場一致で承認したことを大いに強調し、さらに審議会やカリマーラ同業組合の役員、一般組合員、「自分と競った者たちでさえ」<sup>40</sup>、満場一致で自分に賛同したと続けて3回も繰り返している。また、審判者の経歴や専門性の多様さを強調している。こうした繰り返すすべてが、老練な名匠側に対する一種の居心地の悪さを吐露していると言える。それは疑いなく、より広範な芸術団体内部における何らかの見解の不一致によって惹起されたものである。彼が限定的に用いている「<sup>アート・ザット・タイム</sup>その時に」という文言は、コンクール時に彼が満場一致の承認を得たということを意味しており、また、『コンメンタリ』執筆時に、彼が、自身の初期の作品に対する反感が成長しつつあったことに気づき、それに憤然としたということを示唆している。

幾つかの断片的な証拠は情況的に真実であり、コンクールが一度は引き分けに終わったという主張を支持する傾向にある。そもそも、カリマーラ同業組合のさまざまな組織が自分たちの最終選択を正当化するためにとった用心はかなり異例であるように思われる。審議会の見解の文書による声

明文を守ったり、さらには一般会員の諸見解に頼ったりすることは前例のないことであった。そうした諸行為はおそらく最終決定に付加的な重みを与えるために、この事例に特別に考案されたものであったように思われる。第二に、コンクールに提出されたすべての浮彫群のうちでは、ギベルティとブルネッレスキの2点の浮彫（図2、図3）しか現存していない。ギベルティの浮彫は優勝作品であり、別の門扉で「そこに旧約聖書が表現されることがあれば」、使用されようとしていたため、当然保管されたのであろう。カリマーラ同業組合の組合員たちは、何といたっても必要以上には浪費することのない賢い商人であった。同様に、ブルネッレスキのコンクール・エントリー見本品が、残りの敗者の見本品がおそらくそうであったように、鋳つぶされることがなかったのは奇妙に思われる。75ポンドの良質のブロンズを完全に無駄にするにも拘わらず、彼の小パネルが意図的に救われていたとしたら、そこにはそうした理由があったはずである。また、審議会が、最終決定において自分たちの選択が分裂したことを裏付ける証拠としてそれを保持しようとしたことは十分ありうることである。

ギベルティの浮彫はカリマーラ同業組合の謁見室に置かれた。ブルネッレスキのものは、1421年以降は、伝承ではブルネッレスキからコジモ・デ・メディチに贈答品として贈られ、サン・ロレンツォ聖堂の旧聖器室の祭壇裏側の背板<sup>41</sup>に嵌め込まれていた。いずれのパネルも、ウフィッツイ美術館経由で1859年にバルジェッロ国立博

物館に収蔵された。その他の競技者たちの浮彫群については何も知られておらず、おそらくは一点も残らなかったと思われる。これと反対のヴァザーリの曖昧な示唆は、信頼に足らないものとして放棄されなければならない<sup>(42)</sup>。

[注]

- (1) Horn (bibl. 219, pp. 100ff) と Paatz (bibl. 375, II, pp. 173ff) は、洗礼堂とその伝説的起源の歴史も要約。
- (2) Horn, bibl. 219, pp. 126ff.
- (3) *Divina Commedia, Paradiso, Canto XVI*, vv. 22ff, bibl. 114, p. 126.
- (4) Villani, bibl. 538, Book I, chapter I.
- (5) Vasari-Frey, bibl. 532, pp. 329ff, docs. 7, 13 (以下、Frey として引用); Paatz, bibl. 375, II, p. 200, notes 149ff.
- (6) Paatz, bibl. 375, II, p. 206 と note 177.
- (7) アンドレア・ピサーノの青銅門扉の歴史については、Paatz (bibl. 375, II, p. 95) と Falk (bibl. 151, pp. 40ff) を参照のこと。
- (8) Falk (bibl. 151, p. 57) は、留保付きではあるものの、その青銅門扉が元々は大聖堂と向かい合うように置かれていたと推測。
- (9) フィレンツェの芸術活動における同業組合の重要性については、まず Doren (bibl. 135)、後には Wackernagel (bibl. 543) が指摘。
- (10) Doren, bibl. 135ff の諸所。
- (11) *ibid.*, I, pp. 20ff.
- (12) Pieri, bibl. 398 の諸所。
- (13) Doren, bibl. 135, I, pp. 407ff; Agnoletti, bibl. 4 の諸所。
- (14) Doren, bibl. 135, I, p. 403.
- (15) それ以降については、*ibid.*, II, pp. 702ff、特に pp. 704ff を参照のこと.; Wackernagel, bibl. 543, pp. 218ff; Paatz, bibl. 375 の諸所と下に引用する史料。
- (16) Davidsohn, bibl. 118, I, pp. 145f.
- (17) Frey, bibl. 532, pp. 328ff 中の諸史料。
- (18) 当該史料は Frey が出版 . Bibl. 532, p. 353, doc. 31; Oertel, bibl. 367, pp. 266f は、正当にも、その素描は壁面上の大規模なスケッチであったと結論づけた . Paatz, bibl. 375, II, p. 244, note 122 も参照。
- (19) Frey, bibl. 532, p. 340, 1365 年 3 月 1 日の年記のある doc. 59.
- (20) 15 世紀の最初の 33 年間の期間におけるフィレンツェの政治的状況については、Baron, bibl. 39 が明快に分析。
- (21) Bruni, bibl. 77, pp. 920f.
- (22) その行列がとった行程は、Zocchi, bibl. 563, pl. XXI にエングレーヴィングで示されている。
- (23) Ghiberti-Schlosser, bibl. 178, I, p. 46, 並びに上述の p. 12.
- (24) その伝記については、いずれも未完成の二つの写本が伝存している . 最初の写本はフィレンツェの国立図書館 (Magl. Cl. II. II. 325; Mazzatinti, bibl. 313, IX, p. 95) にあり、Baldinucci, bibl. 36, pp. 291ff に付録として付けられ、19 世紀初めに Moreni が出版したものであった . それはマネッティの *Uomini singholari* と他の著者たちによる著作からなる 1 冊の写本中に含まれており、疑いなくすべてマネッティ自身の手で書き写されている。しかし、マネッティはその冊子全体の著者ではないため、『ブルネッレスキ伝』を編むことはしなかった . Chiapelli (bibl. 95,

pp. 241ff）が実際にピストイアで見出し、フィレンツェの国立図書館に提供した二つ目の写本は、前者と同様に断片的ではあるものの、マリアベッキアーナの写本が突然中断している所からその伝記を続けている。本書の引用文は、E. Toesca, bibl. 294 が出版した Chiapelli 写本の重刷版を典拠としている。

- (25) Termini post（上限）は、1471年に発生したサント・スピリトにおける火事に触れていることや、明らかに15世紀後半に行われた「教皇や枢機卿、ローマ人やその他の人々」によるローマからの彫刻群の移動に言及していること、また、その小冊子全体の“post-Albertian”（「アルベルティ以降的」）な流れによって設定されている。Holtの翻訳の脚注, bibl. 218, pp. 45ff は、その小冊子の年代設定、「ブルネッレスキの死後ほんの数年」を説明していない。Terminus ante（下限）は、そのフィレンツェの写本を書いたアントニオ・マネッティの1497年における死によって設定される。
- (26) Vasari-Milanesi, bibl. 533, II, pp. 223ff; pp. 334ff.
- (27) Poggi, bibl. 413, docs. 905ff, 後続のパラグラフの引用はそこから取られている.; Doren, bibl. 133, pp. 8f も見よ。
- (28) オッフイチャーリ・デル・ムザイコをカリマーラ同業組合の協議会指名の委員会として組織したのが1370年であることは、サン・ジョヴァンニ洗礼堂の洗礼の泉に関する記述“…factus est ipse Fons…ab officialibus istius operis deputatis a Consulibus Artis Kalimale…”によって確証される（Befani, bibl. 44, p. 71）。

(29) ギベルティ自身、*operai di detto governo* という用語を用いている.; Ghiberti-Schlosser, bibl. 178, I, p. 46 を見よ。

- (30) 中世を通じてイサクの犠牲の諸場面は、主要な登場人物、すなわち祭壇に跪くイサク、剣を持ち上げるアブラハム、天から出現する神の手もしくは御使いの手、藪に隠れた羊に限られていた。そのような場面は、まず4世紀の石棺や小容器に登場し、13、14世紀まで長きに亘って続き、《聖ルイの詩篇》（Paris, Bibl. Nat., lat. 10525; Omont, bibl. 373, pl. x）やアッシジのトリッティの壁画（Van Marle, bibl. 301, I, fig. 109）、パドヴァのジュスト・ダ・メナブオイの壁画中に表現される。中世を通じて、驢馬と召使たちが犠牲そのものと同一場面に示されることは決してないように思われる。彼らは附属物であり、十分に展開される場合も省略される場合もあるが、主場面とはつねに性格を異にしている。9世紀のコスマス・インディコプレウステースの『キリスト教地誌』では、召使たちは驢馬を連れ、アブラハムとイサクの後を歩いており、イサクは薪束を運んでいる（Vat. Gr. 699, f. 59; Stornaiolo, bibl. 507, pl. 22）。同頁の別の場面にはイサクの犠牲が表現されている。同じ頃（880-886）、ナジアンゾスの聖グレゴリオウスの説教集（Paris, Bibl. Nat., gr. 510, f. 174; Omont, bibl. 372, pl. 37）の挿図では、アブラハムは召使たちに荷運びの家畜と待つように命じ、薪束を負ったイサクは先に立って丘を登っている。また、犠牲の場面は例によって別の場面に描かれている。二つの場面は、盛期並びに後期中世までは、依然としてはっきり区別されている。1356

年頃の『ジャン・ドゥ・スイの聖書』

(Paris, Bibl. Nat., 15397) の挿図では、アブラハムは召使たちに待つよう命じ、f. 36v 上では彼らが待機している間、驢馬は泉から水を飲み、アブラハムとイサクは山を登っている (Martin, bibl. 306, fig. LXI, pl. 45; fig. LXII, pl. 46). イサクは大抵薪束を運んでいる (Franco-Flemish Bible, Lille, Witter Coll., 13 世紀末; イザボー・ドゥ・バヴィエール王妃の詩篇、ミュンヘン、国立図書館、gall. 16, f. 29v; フランスの詩篇、14 世紀、オックスフォード、Bodl., Auct., D. 44; James, bibl. 230, pl. 2b). このモチーフは、言うまでもなく、中世末期の『貧者の書』や『人類救済の鏡』(Cornell, bibl. 106 の諸所; Lutz-Perdrizet, bibl. 284, pp. 170, 214; pl. 43) において、十字架を負うキリストの予型論的対応モチーフとして役立っている。

- (31) Berlin, Kupferstichkabinett, 78 E 3, f. 4 (Wescher, bibl. 550, pp. 54ff), また、Vienna, Nationalbibliothek, cod. 1191 (Theol. 53), (Hermann, bibl. 210, pp. 250ff) も参照せよ。その写本は、ピッティ宮にあるラファエロが描いたレオ X の肖像画中に表現されている。Wescher, *loc. cit.* を見よ。
- (32) Vasari-Milanesi, bibl. 533, p. 224. その特別な一節はヴァザーリの第二版に挿入されている。それゆえ幾分怪しい。Ghiberti-Schlosser, bibl. 178, II, p. 169 も参照せよ。
- (33) (Anonimo Magliabecchiano), bibl. 22, p. 274.
- (34) (Manetti), bibl. 294, p. 14.
- (35) Ghiberti-Schlosser, bibl. 178, I, pp. 45f.
- (36) クエルチャに関する最近の最も権威ある

モノグラフは Bacci のものである、bibl. 31. Bacci は、存在する唯一のフランチェスコ・ダ・ヴァルダンブリーノに関するモノグラフも出版、bibl. 30. ニッコロ・ランベルティとニッコロ・ディ・ルーカ・スピネッリとの同定は Procacci が確定、bibl., 427, pp. 300ff. 従って依然としてよく分かっていないのは、競技者たちのうちシモーネ・ダ・コッレ唯一人である。

ヴァザーリ (Vasari-Milanesi, bibl. 533, II, pp. 226, 335) は、この競技者の一覧にドナテッロの名前を加えているが、それはかなり恣意的と思われる。ドナテッロの誕生はおそらく 1386 年であり、彼の参加は除外される。

- (37) Ghiberti-Schlosser, bibl. 178, I, p. 46; II, pp. 168ff.
- (38) ASF, *Arti, Seta, Matricola*, vol. VII, c. 68v; Fabriczy が引用, bibl. 148, p. 5.
- (39) (Manetti), bibl. 294, p. 42.
- (40) Ghiberti-Schlosser, bibl. 178, I, p. 46.
- (41) (Manetti), bibl. 294, p. 15.
- (42) ヴァザーリは自身の著作の初版において、ギベルティとブルネッレスキの浮彫は最良であり、ドナテッロのものは好ましく、クエルチャのものはドナテッロやフランチェスコのものと同等、シモーネとニッコロのものは一番よくないとだけ述べている (Vasari-Ricci, bibl. 531, I, p. 261). ヴァザーリは第二版ではこの所見を推敲し (Vasari-Ricci, bibl. 531, I, p. 261)、ドナテッロの浮彫は両替商組合に贈られ、それゆえ自分はそれをよく知っていたと仄めかしている (Vasari-Milanesi, bibl. 533, II, p. 335). しかし、ヴァザーリが決してそのような浮彫を



目にしなかったことは明らかである。そして事実、彼はドナテッロの生涯中（*ibid.*, II, pp. 395ff）ではそれについて一切言及していない。コンクールのその他の浮彫群に関する記述は、ギベルティやブルネッレスキ、クエルチャ、ニッコロ・ダレッツォの生涯中に散見されるが、依然として一般的な記述のままであり、また明らかに、それぞれの巨匠の様式に対する彼の実際的もしくは真偽の疑わしい知識に基づいている（*ibid.*, II, pp. 113, 226f, 335）。ヴァザーリはおそらく好きなように想像を働かせたのである。Ghiberti-Schlosser, bibl. 178, II, p. 169 も 参 照 の こと。

イサクの犠牲を表現した1460-70年頃の制作と思われる1点のエングラヴィング（Uffizi 27）は、コンクール・パネルのうちの一つを再現していると考えられてきたが（Kristeller, bibl. 255, pp. 277ff）、その仮説は控え目に言っても疑わしい。Hind, bibl. 213, I, p.27; II, pl. 5 と Ghiberti-Schlosser, bibl. 178, II, p. 170 も 参 照 の こと。

---

[訳者注]

本拙訳は Richard Krautheimer, *Lorenzo Ghiberti*, in collaboration with Trude Krautheimer-Hess, Princeton, New Jersey, Princeton University Press, Second paperback printing, 1990, pp. 31-43 を 訳 出 したものである。

---

[謝辞]

本拙訳は、JSPS 科研費 JP15K04451（分担）の助成を受けて行った研究成果の一部である。記して感謝の意を表する次第である。



図1 アンドレア・ピサーノ  
フィレンツェ洗礼堂南青銅扉 1330-1336年



図2 ロレンツォ・ギベルティ  
《イサクの犠牲》 1401-1403年  
フィレンツェ バルジェッロ国立博  
物館



図3 フィリッポ・ブルネッレスキ  
《イサクの犠牲》 1401-1403年  
フィレンツェ バルジェッロ国立博  
物館